

現実動作と美的動作・舞踊

若松美黄

1. 動きと舞踊の分離は難しい

日常的な身体表現を、行為、行動、身ぶり、しぐさ、動作、身体運動等、使い分けている。近年、「動き」の語が、ムーブメントの意味内容で使用されている。本シンポジウムでは、舞踊と動きを一線を画すものとして扱っているが、実際にはこの両者の差異は明確ではない。

舞踊を精練されたもの、動きは現実の俗なる動作といった社会通念は次の点で補正しなければならないだろう。

- 1) 低俗な出身の芸能が精練された舞踊の出発点に多く見られること。
- 2) 舞踊作品は、時代の現実的な要素(ナマなもの、低俗なもの)を取り入れ、精練されたものに仕立てる傾向があること。
- 3) 精練の破壊と新しい美の創造は歴史的な原則であること。

1) の例～ ミムス(性的黙劇)ーパントマイム、レッチム(ユダヤ芸能人)ーバレエ、田楽・猿楽一能。2) の例～バレエの民俗舞踊の導入、マス・ヒステリアとしてのダンス～タランテラ、時代の題材・流行の舞台化・身体化。3) の例～インドの舞踊神シバは破壊と創造の神、葬儀の暗さを払って爆笑を導いたウズメは太陽を呼び戻した。ギリシア喜劇の効用は、祭礼の新たな出発にある。この日は、ラ・シルフィードを例にロマンチック・バレエがクラシックバレエの精練を破壊した様相を検討した。

2. 舞踊を動きと分ける観念

舞踊を分ける原則を次の5点とした。

- 1) 実際の労働や行為ではない～無用性の語を使用する人もある。例えば、ミツバチの踊りは労働ゆえにダンスとはならない。あそび「何の故にか、天宇受賣は楽^{あそび}を為し」(古事記)等。
- 2) 様式性がある～時間空間力性にわたって様式性が見られる。リズム、化粧・仮面・採り物、アクセント、虚構性。
- 3) 情動反応を基底に持つ～呪術性・緩和的情動反応、狂うクルククルウ回る「異形のおん姿にて面白くおん狂い候」(謡曲・花月)、変身
- 4) 何らかの観客を想定し、伝達・表現を伴うもの～神を見る3極伝達。送り手・神・立会人。
- 5) ミステリアスな性格を持つ～現実世界からの離脱、神憑りの要因内包「正気に戻るまでの状態」(折口信夫)意味の含蓄。

しかし、儀礼的動作との差は、1)3)の無用性、

情動反応、の程度の差であり、質的には分離できない。現実動作とダンス・ムーブメントの差を資料1とした。

3. 精練を促す要因

低俗な出身の芸能が何故、精練に向かうのか。ここには二つの視点がある。

1) 身体構成～ヒトの身体は、動きを反復することにより、筋肉・神経細胞回路が新しい構成を生み出したり、呼吸循環器系部位間の効率調整が行われて、無駄な力を省く性質がある。この傾向は動作をより滑らかにしたて、精練に近接する。

前者の例では神経細胞伝達経路に脂肪性の絶縁帯であるミエリン鞘ができ、ダンサーの反復を効率よく保持すること、後者の例では、呼吸調整が名手と下手との差異に現れること、などが挙げられる。ダンサーの反復訓練はこうした身体構成に由来し、リンカーン・カースティンが云う「十字架の反復」が求められるのである。

2) 社会構成～芸能が社会的に、あるいは民族・国家的に是認されると、それは現体制賛美のなかに組み込まれ→公序良俗化＝ノモス(民族規範)化する。大嘗会 ^{おにえのまつり}に久米舞が演じられるがその歌詞は、妻より愛人を可愛がる粗野な心情が残っている。しかし、現在は3倍はゆっくり演じられるようになり、典雅な歌舞^{うたまい}として残っている。ダンスにおける古典は、どの国においても社会的に精練化に向かう。



図1. 劇場的伝達における現実・美的動作のフローチャート

4. 精練とナマな素材

このことは、ナマな情動や現実のインパクトを遠ざけ、ついには希薄なものとする傾向を内包している。この精練は衰退・退屈につながり、いつの時代においても、舞踊の新しい流行や運動を促してきた。精練は絶えずナマな現実要因を取り込み活性化しなくてはならない。

話題となる前衛の表現技法や時代の流行に気を取られて、そのこと自体を新しいと錯覚することは愚かだ。舞踊には長期的視点が忘れ去られてはならない。舞踊のそして身体の根は深く、デケイド(10年)単位で見なくてはならない。

技法の個々にも、精練要因と現実要因が見られる。ドリス・ハンフリーは、ダンスを「二つの死点の間の円弧」の連続として捕られた。運動は、

あるバランスの破壊＝現実要因から起こり、やがて次の調和＝精練を得て静止する～その連続だといふのである。

ナマな現実要因－活性化とは、技法にも、作品の題材にも、様式にも見られるのである。

5. 動きのもとの身体とその観念

バレエの精練美の素にあたる身体とその観念の一部を検討したい。

1) 肉体条件・プロポーション

素材としての肉体は、現実の生活感が排除されなくてはならない。多産の母性や、平均的でない特異な身体は好まれず、表現を変えれば、

①プロポーションが良いこと

②年少美ないしは処女性の強調

の二面が必須である。

ここでは、日本的な「心技体」ではなく踊り手の「身体・技術・心」の順で考えられている。バレエのメッセージは、人間のドラマであるよりは宇宙典型的・非日常的な世界の展開が多く見られ肉体は神格化し「人間」を感じさせては適合しにくくなる。

年少美・青春美もバレエでは大切で、ルイ14世が30過ぎに引退したことが象徴するように、主人公は10代が常で、中年・老年の女性であったことはない。そのため、初々しさ・未熟さに寛容な一面、若さのないエレヴェーションは非難される。この風土が日本では理解されにくい。

ここでも、ナマな現実感ある肉体の登場は、舞台を活性化する。老いた名花バレリーナが女王役で登場するのも、好んで見られる妊婦も、小柄な道化役も、このような役割を持っている。

しかし、肉体的感情は、人間性の保守的部分であり、全体としてはなかなか変わらない。今日でもダンサー像は、年少で、容姿端麗が主流である。

2) エフォートレスのとらえ方

バレエの精練は、労働の汗、努力の跡、技術の満足などを見せてはならない。この努力が目立ってならない原理を effortless という。タリオニの頃は、アラベスクも現在の急角度のパンシェ（前傾アラベスク）の型をとることはなく、低い優雅さがすべてに優先した。ニジンスキーがバレエ学生であったころ、彼の跳躍に人々は関心を示さなかったとカルサピナが「劇場通り」に書いている。

初心者が踊りを綺麗に見せるには、このエフォートレスの克服がなされなくてはならない。力を入れることはやさしいが、抜くことは容易ではないからだ。（実技・実例 金田尚子）

このエフォートレスの原則も、インパクトを求めるダンサーの高度技術によって、破られ、また次の精練を獲得するという循環を形成してきた。

反対に、顔を歪めて苦悩を踊るモダンダンスのインパクトも慣れれば衰弱した精練にもなる。今日では、エフォートレスのみを磨き上げることでインパクトを獲得することも出来るかもしれない。

6. 結 び

時代や人間性により、現実動作と美的動作は割合を異にするが、本質的に両者あいまって舞台を活性化するのである。

表 1. 現実動作と舞踊の動作の特徴比較

現 実 動 作	舞 踊 の 動 作
1 実際的な目的動作 動作内容の単位・完結性 動作内容の時間の序列性 動作の効率を重んじる 動作内容に応じた空間 無意識動作の混入	1 実際的な労働や行為ではない 動作単位の全体像への統合 動作時間の非序列性・拡大縮小 装飾的表現の出現 空間の枠組み破壊・再構成 意志動作の構築
2 動作自体のパターン 動作自体の目的 目的達成の意図 動作自体の自然様式 動作達成の運動力性を持つ 動作自体のリズム	2 様式性がある 動作の分解・意味の再編成可能 インポート（ランガーによる） 様式の尊重・全体像の統合 力性の様式的統合 様式的リズム
3 動作付随の感情 日常的個別の感情 動作に伴う無意識的感情 自然な情動の発露 恣意的感情 感情の節約	3 情動反応を基底に持つ 構成された感情表現～鎮静・高揚 感情と動作の統合・分離 虚構的・演出的情動 統制的感情 感情を示す
4 見られることを前提にしない 動作の理解単純 現実の評価性 公序良俗性の枠	4 何らかの伝達・表現性を持つ 意味・理解文脈の複雑 他者による評価性 見せ物としての許容性
5 意味不明な動作はない 現実の背景での意味 現実の場所での意味 現実の小道具の意味 現実の人間関係 社会階層に応じた動き	5 ミステリアスな要素を持つ 虚構の意味の象徴性 虚構の場所の象徴性 造り物の小道具 虚構の人間関係 神を内包する傾向